

令和元年度 日本大学スポーツ科学部 学部研究費 研究実績報告書

所属： スポーツ科学部 競技スポーツ学科
 資格： 准教授
 氏名： 秋葉 倫史

研究課題名	完了を表す構造の変遷と文法化の関連性
研究目的及び研究概要	<p>【研究目的】 本研究では、通時的にみられる完了を表す構造をコーパス・聖書・日常的な文献から収集・分析し、その用法の特徴と使用頻度の推移を記述すること及びその変化を文法化理論の観点から説明することを長期的目的として設定している。</p> <p>【研究概要】 上記目的を達成するために、本年度は以下の点から研究を実施した。 ① 完了を表す構造の通時の変化を概観するため、通時コーパスから用例の収集・分析を行う ② 古英語以前の形式を調査するため、ゴート語の文法に関する先行研究の検討及びゴート語聖書における該当例の収集・分析を行う ③ 完了用法以外の一般言語変化事実を確認するため、「動名詞」に焦点を当て、通時コーパスから用例の収集・分析を行う</p>
研究実績の概要	<p>上記研究概要①～③に対応した研究進捗状況・成果及び課題は以下の通りである。</p> <p>① 英語における完了構造の変遷について 通時的コーパス (YCOE, PPCME2, PPCEME, PPCMBE2) の範囲において、(1) have 完了形、(2) be 完了形の構造を中心に古英語～現代英語までの全体的なデータを確認した。 (1) ..þa þa ge hiene gebundenne hæfdon (Or 6 37. 296.21, Traugott 1992: 190) (2) The hour is come. (江川 1991: 240) 本調査では、先行研究で述べられる have 完了形の確立と用法の増加傾向及び be 完了形の変異動詞と結びつく限定的な用法とその衰退傾向を示した。have 完了形の起源である 'have + NP + p.p.' 構文に焦点を当て、本動詞 have の所有の意味とその NP (目的語) の性質との関連性を検証し、また構文全体の意味を文脈から割り出すことで、中英語後期に have 完了形の用法が確立した可能性を示している。</p> <p>② ゴート語の完了構造の調査について 英語の完了形発達の前段階として、ゴート語聖書を基にゴート語の完了を表す形式を調査した。先行研究にみられるように、完了の文脈の大半で過去時制が用いられること、また一部では現在時制も用いられることを確認した。また、(3) のような接頭辞の 'ga-' が完了の意味合いを補足することを確認の上、接頭辞と完了形発達の関連性を調査し、接頭辞の消失が完了形発達に影響する可能性を示した。 (3) nig ga-swalt so mawi, ak slepiþ (The Gothic Bible, Mt 9:24, Los 2015: 68) 本調査では、ゴート語聖書のみを資料としているため、データの総量が少ないことが課題として挙げられる。今後は検証する文献数と形式・接頭辞の種類を増やし、より詳細な調査を行う予定である。</p> <p>③ 動名詞の発達について 言語変化に関わる基礎調査として、本年度は動名詞を完了用法以外の文法事項として取り扱った。動名詞の発達は、古英語で -ung (-ing) を付加した派生名詞であったものが、動詞性を強めていくもの (Nominal Gerund から Verbal Gerund への変化) として説明される。これらの動名詞の古英語～現代英語までの変遷を通時コーパスを基に記述した。Nominal Gerund と Verbal Gerund を分類し調査した結果、先行研究で論じられるように Verbal Gerund が動詞性を獲得していく流れを確認した。また、それらのデータに従って、構造変化を考察した結果、本来名詞であったものが、現在分詞との混同により構造にVPを内在するようになり、さらに受動・完了構造といった用法の拡張を経て動詞的性質から文としての性質を強めていく過程を示した。 本調査では、各形式の内部構造について十分に議論されていないため、今後は構造の記述方法についても検討を行うこととなる。なお、本内容については、令和2年度5月 (台風の為令和元年10月より延期) 日本大学英文学会英語学シンポジウムで発表の予定である。</p>